

## (節子かあさんの遺言)



小学校を卒業して6年が経って、その卒業生ほぼ全員の進路が決まったある日、同窓会が開かれました。それは4月のことで、まだ5月病になる人も居ず、みんなわいわいがやがや。

ところがその時に、ふとした話しの流れから、せつちゃんが同窓会の二年前の今頃、交通事故で17年の生涯を閉じたことを知りました。

せつちゃんの本名は節子といい、当時としてもあまり今風の名前ではありませんでした。当時僕らの通っていた小学校は、有名都立高校に入る前段階として、有名進学校である中学に行くための予備校みたいな小学校で、越境入学者なども居ました。お金を払って学区内の家に住んでいることにしてもらったのです。実は僕もその一人でした。

つまり殆どの家庭が裕福だったのですが、せつちゃんの家はそこの中であって、珍しく余り裕福とは言えない家庭でした。

頭は天然パーマなのか、それともかきつけていないからなのか、いつもぼさぼさで、聞くところによると、お母さんが働きに出ている間、せつちゃんが毎晩夕食を作っていたりするのでそれどころではないのだろうとのことでした。

そんなわけで、勉強ばかりしているぼくら同級生は、家事に忙しくて勉強どころではないせつちゃんのことを競争相手から抜かして無意識にも下にみるようなところがあったのです。僕もそうだったような覚えがあります。

ところが、5年生の家庭科の時間に、先生から出された課題の料理がうまく出来なくて、数人の男子がもたもたしていたのですが、時間も差し迫った頃、その節ちゃんが、ちゃちゃっと茹でて、刻んで、和えて、その男の子たちの前に出したのが、最後の課題料理のマカロニサラダでした。

「はい！これで全部出来たよね」

自分でもよく分からないのですが、その時の光景をぼくは妙にはっきり覚えていて、その後何回か思い出しても、最近では、その頻度が多くなっているような気がします。特にころがなんとなく弱っているときに多いような気がします。

別に、せつちゃんは初恋の女の子ではありません。どちらかというと老け顔で、あまり可愛い方ではなかったです。地味で、言い方は悪いのですが「おばんクサ」かったような。

しかし何故か、自分に自信が持てず何のためにこの世に生を受けたのか分からなくなってしまうようなときに限って思い出すのです。

話は変わりますが、最近スーパーによく買い出しに行きます。ですが、スーパーで売っているパックのマカロニサラダは、甘すぎて量も少なく余り好きではありません。あのととき節ちゃんが、ちゃちゃつと作ってくれたマカロニサラダは、幾分酸っぱ味が強くて、マヨネーズも少なめでさっぱりしていたし、量も、ど、ドーンと多った。

ぼくは今、一人暮らしで自炊をする境遇になっていて、時々マカロニサラダを作るのですが、お手本は何故かあのとときのマカロニサラダの味です。そういえばあのととき以来、マカロニサラダは上手く作りたいと思うようになった気がします。

今思い出したんですが、節ちゃんには八重歯がありました。可愛い八重歯ではなくて、乱ぐい歯の一部として外に突出しただけの八重歯。

「早く食べなよ。授業が終わっちゃうよ」と言った時、笑い顔の端に見えた乱ぐい歯。

これまた何故かは分かりませんが、異常にはつきりといつも、何回もその時の家庭科の教室の風景とせつちゃん的笑顔をリアルに思い出すのです。

「わかってるよ。せかさないで、おかあさんみたいに」

目の前に置かれたブリキ製のお皿にてんこ盛りに盛られたマカロニサラダ。

子供とは言え「男子の」負けん気から素直に「うん」といえず、減らず口をたたきました。あのとときだけは本当に助かりました。主要5教科は出来ても、日頃家事などやったことなど全くない僕や同級生は家庭科が大の苦手の子が多かったのです。

そういえば、あのととき、節ちゃんは自分の分はなかったんだ。それに誰もそのことには気づかなかった。そんなことに、50年近くもたった今、思い当たりました。

50年間、そのことに気づいてあげられなかった。だのにせつちゃんはみんなのお母さんみたいに、何も言わずに笑っていた。あの乱ぐい歯を見せて。

既にかかなりの時間が経っているのに、せつちゃんも遙か空の彼方のその遠くに行っていて、届くかどうか分かりませんが、改めて心からお詫びとお礼を述べさせて戴きたいと思えます。

「ごめんね、せつちゃん。でも、今更だけど、ほんとあのとときはありがとうね」

これからは、無念な思いで亡くなったであろうせつちゃんの分まで

「ちゃんと生きていかないと、な」と思いました。

残った者がしつかりしなくてはいけない。そうでないとせつちゃんに申し訳が立たない。「申し訳なんてどうでもいいけど、ちゃんとそうしてね」

空耳だとは思いますが、せつちゃんがそう言っているように聞こえました。

あの八重歯を見せてお母さんみたいに笑いながら、50年遅れで届いた遺言ビデオの中で。

(完)